

ず、深き淵に擲つ。兒また水の上に浮出でて足を踏み手を攢み目を大きく瞻睚りて、慷慨みて曰はく「惻きかな。今三年徴り食はむをや」といふ。母怪びてまた会に入り法を聞く。大徳問ひて言はく「子を擲捨てたりや」とのたまふ。時に母答へて具に上の事を陳ぶ。大徳告げて言はく「汝昔先の世に、彼の物を負ひて償ひ納めざりしが故に、今子の形と成りて償を徴りて食ふ。是れ昔の物主なり」とのたまふ。嗚呼、恥しきかな。他の償を償はずよりは、むしろ死なむや。後の世にかならず彼の報有らむのみ。所以に出曜経に云はく「他に一銭の塩の償を負ふが故に、牛に墮ち塩を負ひ駆はれて、主の力を償ふ」とのたまふは、其れ斯れを謂ふなり。

塔を建てむとして願を發す時に生める女子舍利を捲りて産る縁 第三十一

丹生直弟上は、遠江国磐田郡の人なり。弟上塔を作てむとして願を發し、いまだ其の塔を造らずして淹しき年を歴、なほ願を果さむことを睽、毎に懷を軫ましむ。聖武天皇の御世に、弟上は年七十歳妻は年六十二歳にして懷妊み

て女を生む。左方の手を捲りて産生る。父母怪びて、捲れる手を開けば、いよますます固く捲りてなほ故に舒べず。父母愁へて曰はく「嫗時にあらずして産みたれば子の根具らず。斯れ大なる恥とす。因縁を以ちての故に汝我が子を生む」といふ。すなはち嫌棄はずして慈ひ哺育む。やうやく長大るに隨ひて、面容端正し。年七歳に至りて手を開きて母に示して曰はく「是の物を見よ」といふ。因りて掌を瞻れば舍利二粒有り。歎喜び異奇びて諸人に告知らす。諸人衆喜び、国司に展転ふ。郡卿ことごとく喜び、知識を引率て七重の塔を建て、彼の舍利を安きて供養し了りぬ。今磐田郡の部に建立つ磐田寺の塔是れなり。塔を立てて後に、其の子忽に死ぬ。闔に知る、願はば得ずといふこと無し、願はば果さずといふこと無し、といふは、其れ斯れを謂ふなり。

寺の息利の酒を貸用て償はずして死にて牛と作り役はれ債を償ふ縁 第三十二

聖武天皇の世に、紀伊国名草郡三上村の人、葉王寺の為に知識を率引、葉

「六」發育の遅れがみられる。脚で歩くことができない子を淵に捨ててのイメージは、書紀・神代の蛭児(三)のイメージに共通するものがある。
「三」主人公の呼称および表記を「女人」「嬪人」「嬪」「爾母」「母」と変化させている。
「二」「すつ」「なげすつ」の表記を「捨」「棄」「投」「擲」「擲捨」と変化させている。
「三」上巻三十四縁。三「うだく」の表記を「携」「抱」「携」と変化させている。

一「上巻」縁。二「中巻」縁。
三「あと三年間」とたてて食おう、としていたのに。乳の価格(上巻二十三縁には「乳直」とあった)を想定しているような表現。
四「他人に負った債務を返済しないならば、どうして死んだりしないか。返済しないかぎりけつして死んだりしない。五「負債を返済せずに死んだならば、未来世にかならずその報がある。六「出曜経・無常品の説話にもとづく。諸経要集・契交部・債負縁所引の文の取意か。

第三十一縁 今昔物語集・十二ノ二に書承。
七「舍利が納められているのが塔(摩訶僧祇律・三十三縁)。「塔は取三世仏舍利之宝蔵也」(下巻三十三縁)。「へ身骨。ふつらは仏の遺骨をいう。公非(血肉身)云何有舍利、方便留身骨、為益諸衆生」(金光明最勝王經・序品)。八未詳。本説話以外に所伝をみない。「二」静岡県磐田市、磐田郡あたり。「一」塔を建てる意の表現を「作」「造」「建」「建立」「立」と変化させている。「三」時期はずれに。高齢での出産をいう。「二」肉体の能力および器官。「四」因縁があったので、あなたはお子を生んだ。「四」の子をあなたと私との子として育てなければならぬ因縁がある。

前生での因縁を想定しての叙述であるが、前生での因縁の具体相は述べられない。「五」次から次へと伝えられていく様子をあらわす語。
二「上巻三十五縁」。

七「天平十九年(西暦七二四年)四月に、伽藍の院内に限り百姓の造塔を許す」という勅(統紀)がみえる。この勅にいう「塔が元正太上天皇の不予にかかわったのものであれば本説話との関係は稀薄だが、元正太上天皇の不予にかかわったのもでないならば、本説話に關係するところは大い。聖武天皇は天平勝宝元年(西暦七二九年)に退位。したがって、「聖武天皇御世」に造塔が許された時期はかなり限定される。また、「七重」の塔は諸国の国分寺の塔と同じ形である。国分寺には七重の塔が建てられたことは、統紀・天平十三年三月二十四日条、十九年十一月七日条、類聚三代格・三、などにみえる。遠江国の国分寺は本説話にみえる磐田郡に所在したのだが、磐田郡に七重の塔が二基そびえたつたのか、本説話が遠江国の国分寺の塔の縁起説話なのか、あきらかではない。八未詳。
元より高い地位の存在への転生を暗示する。過去世から未来世へとつづく得脱の道程の一段階として、現在世がある。「三」原文「願無し不得」。大智度論・三十一「無願不得」(原口裕)。

第三十二縁 今昔物語集・二十ノ二十二に書承。

三「前田家本下巻二十六縁訓釈(息利(伊良之毛乃那里)。「息利」は、利息、利息を生むこと。「息利酒」は、利息を生む酒、の意。「いらず」は、貸し与える意。「いらしもの酒」は、貸し与える酒。三「借りる」。

三「和歌山県海南市あたり。三「和歌山市葉勝

寺に所在。三――上巻三十五縁
 三葉のための費用として計上されているもの。
 延喜式・主税に諸國の「葉分料」がみえる（攷証）。
 僧尼令に酒、肉、五辛を疾病薬分とすることが
 みえる。それより推せば、薬分、葉分料、薬料
 などとあるのは、酒のための費用か。この費用
 が貸し出され、寺が利を得ていた。

「息遣は、利息を払って借りる。」「貢は、借りる。」「いらふは、借りる。」「いらすとは対になる語。」「勢多^{セタ}は郷名。」「物とあるのは、薬分料が稻であつたことを示す。」「未詳。本説話以外に所伝をみない。氏が岡田・姓が村主。岡田は、名草郡目来郷に存した村名。」「薬分料の稻を原料として酒をつくり、利息を生ませる。」「うまはずは、増殖させる意。」「本説話では斑文には意味が無い。」「中巻九縁。」「塔の基壇。」「未詳。本説話以外に所伝をみない。」「本説話では、夢の中で動物が人のことを発している。」「上巻十縁。」「未詳。」「未詳。本説話以外に所伝をみない。」「三未詳。固形の塩を粉末にする意。」「和日本紀・十二所引撰津国風土記に、鹿に関して舂塩塗^{ハシ}とみえる。」「固形の塩としては、苦汁^{クシ}を除去するために鹽以外に煎熬による製塩において生産される固形の塩が存した。また、現代の食塩も空気中から固化する。延喜式・主計上にみえる「破塩^{ハシ}」なども固形の塩であらう。延喜式・齋宮にみえる「塩田^シは塩を舂くための器か。塩を準備したものは肉の腐敗を防ぐため。猪肉は、塩を加えたばあいは、脯^ヒ、醃^シ、鮓^シ」などにして食べる。」「延喜式・造酒司には、原料米一石から酒一斗七升八合五勺、とある。」「四この数字の意味するところは不明。」「五檀越であるあなたでないならば決して怒れむわらないだろう。あなただけが怒れむ。」「六なむわはのか。」「七桜村の大娘。」「八岡田村主石人の姉あるいは妹が岡田村主姑女であり、「桜大娘」と称されいたことが示される。」「妹は、姉、または妹。男の立場から女子うよういという。」「九夢の中で「自^ミ非^ヒ檀越^{ダン}、無怒^ム之人^ニ、故申^コ愁^シ状^{ジョウ}」と知られたように、この牛の前生は石人ひかりだけがあった。」「一〇牛を統括する役職か。」「三同名の僧に関して次のような記事がみえるが、本説話の浄達と同一人かいは判然としない。慶雲四年（さ）五月、新羅より帰国統紀。和銅二年（さ）十月、藤原不比等^{フヒト}に請ぜられて植樹寺^シにて維摩会^エを修す扶桑略記。」「三死んでより高い地位の存在（たとえば、人へ転生したことを暗示する。」「三原文豈敢忘矣。」「どうして忘れたらしようか。決して忘れない。」「諸経要集^{シヨ}撰^{セン}扶交部^{フカウ}・債負縁所引成実論^{シヨ}成実論^{シヨ}六業品に拠る。

第三十三縁 今昔物語集・二十ノ三十七に書承。

三 以下の歌は、仏教語を多用しての戯笑歌。歌の歌詞それ自体に奇怪なものが含まれてゐるわけではない。仏教というくらびやかでないイメージを織りこんで、男たちが、「おれたちみんなおまえが好きなんだぞ」と、女にからかう半分で歌ひかけたもの。語音の連想から連想へと展開する歌。云「おまえを嫁にほしい」と言うのは、誰か。毛「おれさまだぞ」このおかただぞと言つてゐるみんな。「あむち」は、我々の敬称。「こむち」は、此の敬称。「よろづのこ」は、多くの人。云「おまえも、酒持つて。」